

桜島ヨースロ

遠賀郡遠賀町

柴田 清昭

昭和18年4月某日早朝、私と二つ下の弟は西鹿児島駅前に立っていた。その年の2月に予科練（甲種飛行予科練習生）として鹿児島の鴨池航空隊に入隊した兄に面会のため、昨夜遠賀川駅から夜行列車で12時間かけて鹿児島まで来たのだ。

駅前から見ると、まず桜島が目の前にゆっくり噴煙をはきながらその雄姿を見せている。写真では見たことはあるが、さすが鹿児島のシンボルだけのことはあると、深い感銘を受けた。また駅前帯は一面の空地で、その中にポツンポツンと数える位の家が建っていた。その中に食堂らしき家があったので、寄ってみると幸い開店していた。中に入り朝食をたのむと、麦飯と汁が出た。当時では食糧事情も窮屈になり、麦飯でもありつけばありがたい方だった。また、唐芋を味噌で煮た汁が特別においしかった記憶がある。食堂の小母さんの説明では、空地が多いのは飛行機の低空飛行の訓練と、空襲の被害からのがれるため疎開が始まり、小母さんの食堂も近々疎開する予定だと言っていた。航空隊の道順を親切に教えてもらい、食堂を出た。

途端に度胆をぬかれる出来事に出合った。初めて見るゼロ戦が桜島の方向から急降下で頭の上から地上スレスレに飛行しているのだ。私の所も隣町の芦屋に陸軍の飛行場があり、毎日訓練があっていたが、その訓練たるや、複翼の練習機（俗に赤トンボと言われていた）に吹流しを引っぱり、それを戦闘機が機銃掃射をするという訓練をしており、そのような悠長な練習風景を見なれていたので、低空飛行といい、そのスピードといい、あまりの違いにびっくりした。

後の兄の説明では、第2次世界大戦開戦前、桜島を含めて鹿児島市内一帯がハワイの真珠湾によく似ていたので、急降下で爆撃の訓練を繰り返し、それが今も続いており、陸軍さんとは訓練内容がテンで違うので自分達も連日激しく訓練されていると言っていた。更に基地を飛び立った飛行機は、桜島を目標に方向をきめると、「桜島ヨースロ」（海軍用語で正常との意味）と必ず復唱するとも言っていた。

当日午前8時頃隊門に行くと、ちょうど練習生が隊伍を整え退門しているところだった。純白の七つボタンの制服で、行進しているさまは実に見事だった。兄とは鴨池公園で、兄の好物の煎豆や、おかきの差し入れを囲んで家の様子などを語り、その日の夜行で帰宅した。

以後兄は、中国の青島、愛知の豊橋と移動の度に短時間の休暇で家に帰っていたが、20年の2月頃、1通の手紙が届いた。大分の柳浦航空隊からの手紙で、面会に来てくれとの短い内容だったので、2、3日して柳浦まで行った。駅からさ程遠くない当時の柳浦の町長さん宅に下宿していたので、その家に行くと娘さんが出て来て、「一足遅かった。昨夜鹿児島の鹿屋に転勤になった。残念です」と涙を浮かべて話された。兄の手紙も隊に内緒で娘さんが出してくれたとのこと。私にはその涙の意味が分からなかったが、後日娘さんからの手紙で、兄が神風特攻隊で最後の基地の鹿屋に移動し、面会できるのは柳浦が最後だという事を知っていたが、

軍の絶対の秘密事項で言われなかったので、万感こもり涙を出されたのだと。そして昭和20年7月19日の朝刊の一面に、4月16日鹿屋基地から飛び立った神風特攻隊の偉勲を全軍に布告し、二階級特進の記事が出て、柳浦の娘さんの様子が理解できたのだった。新聞の記事以降、近隣の人には申すに及ばず、村中の人から村の名誉だと絶賛の声をかけてもらった。

しかし間もなく8月15日の終戦。盛大な葬式を予定されていた兄の戦死もうやむやになり、以後話題すら出なかった。両親の落膽ぶりは見るも気の毒だった。特に母は、昭和20年の兄の命日から昭和37年死亡する間、毎朝兄の位牌の前に座り、さも兄と語り合っているかの如く涙を浮かべている姿を見るにつけ、可哀相としか言いようがなかった。もう少し終戦が早かったなら、兄もあのやさしい柳浦の娘さんと一緒になり、兄弟の中でも特に親思いだった兄が両親に孝行ができ、私にとっても素敵な兄嫁ができたのではなかったかと今に至るまで残念でならない。兄の最後の手紙に私は純血のまま死地におもむくと書いてあっただけにその思いは強く残っている。

平成7年4月7日、私は再び西鹿児島駅前に50年振りに立っている。当時の面影は一かけらも見当らない。一面の空地は、今は繁栄をきわめている。桜島だけが昔のままの姿を見せているだけである。何年前からか定かでないが、鹿屋市から毎年4月になると特攻隊の英霊に対する慰霊祭の招待が来ていたが、私には今だに兄の死は犬死にだったとのヒガミと、毎年私の町でも型通りの安っぽい町主催の慰霊祭はあっており、どうせ鹿屋市でも同様だろうとタカをくくっていたが、今年は50年で区切りの年でもあり、終戦以来の兄への思いも区切りをつけねばと思ったので、招待に応じたものであるが、会場に来て驚いた。

まず慰霊塔公園の規模のすばらしさと、300人は優に越えた参加者は勿論、市の係員の気くばり、更には航空自衛隊からの音楽隊、儀仗兵の参加と、式の始まる直前、航空自衛隊によるさまざまな機種による弔問飛行で身の引きしまる思いが一杯で、こんな盛大な式だったのなら妹を是非連れてくるんだったと後悔した。鹿屋市長の弔辞の中に基地からの特攻隊の総勢約1000人弱、平均年令22才、総数の約6割は10代だったとの話で胸が一杯になった。式も終わり航空基地の記念館に兄の写真がかざってあったので、一層その思いを強くした。生残った戦友の方からの説明で、当時鹿屋基地を飛び立ち、桜島を目標に沖縄に向う時、「桜島ヨーソロ」と報告したと聞き、兄が言っていた通りだなと、50年前を思い出した。

帰途、垂水からのフェリーで桜島が悠然とせまって来た。私は思わず桜島に向って、あんただけが50年前と変わらず兄を見守ってくれていたのだと、思わず小さな声で『桜島よありがとう』とつぶやくと、直後、衝動的に大きな言葉となって口から出た。兄が基地から沖縄に飛び立つ時、万感こめて言ったであろう「桜島ヨーソロ」を。

